



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	沙流郡「波恵村」出土の天和三年銘鰐口について
Author(s)	大沼, 忠春
Citation	北大植物園研究紀要, 6, 25-36
Issue Date	2006-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32886
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_p25-36.pdf



沙流郡「波恵村」出土の天和三年銘鰐口について

大沼 忠春ⁱ

1. はじめに

この遺物は北海道大学植物園内の博物館に所蔵されている¹。付けられているラベルから、沙流郡波恵村在住の岩根静一氏が、明治17年4月に同所で出土したものとして寄贈し、博物館では、当時の史傳部に設けられていた「古器物類」、「旧土人用具類」、「参考品類」、「図画」の類別区分の内、「参考品類」の番号13号として受け入れたことが知られる²。この遺物が、青銅製の鰐口であり、器面に文様があり、年号、願主などの文字が加えられていることについては、受け入れ当時には知られていたと考えられるが、それ以来、これまでに特に注意はされてこなかった。

2. 出土地について

岩根静一氏の住居等が波恵川の西にあったことを河野常吉氏が『殖民状況報文』に記載しており（河野 1899 p97）、明治時代の岩根牧場の写真は北海道大学附属図書館北方資料室にある³。また、明治29年の仮製五万分の一地形図にその位置が示されている。これを現在の二万五千分の一の地形図に写すと第1図に示すあたりの位置となる。

当時の出土遺物の取り扱いについては、郡役所から県勸業課を経て博物館へ納められる例があったけれども⁴、本資料の場合、少し調べてみたが未だ途中経過を示す記録が見当たらない。岩根氏が旧官吏であり、明治17年10月の物産共進会のため出札していたのであれば、直接博物館へ届けたこともありえたのではないかとと思われる。明治19年に参考品類14号として受け入れられている古鍋は湯地定基氏が直接届けているようである。

その後、明治30年代に博物館でラベルが付けられた際、出土場所が「土堂の近方」とされたのだが、現地に明治17年当時「土堂」に相当するような施設があったとは思われないので、おそらく受け入れ当初「土臺」と記載してあったものが、途中で、「鰐口」の出土にふさわしい「土堂」に変化したのではないかとと思われる。なお関連資料の調査を続けたい⁵。

3. 鰐口の形状

この鰐口は大きく破損していて、現存する資料は、正面側の部分に肩と耳と左側の目を含む大破片と、それに接合する裏面の破片2点との計3点で、第2図、第3図に示すように正面はほぼ原形を保ち、裏面の上部、口唇部、右側の目の部分を欠失している⁶。外形の計測の概略は次の様である。

面径は17.5cm、胴の厚みは7cmほどで、正面側のふくらみが強い。裏面には正面のような文様がない。左右の耳の位置は、中心から90度の角度で、左側の耳の付け根の長さは6.3cm、高さ2.9cm、右の耳の付け根の長さは6cm、高さ2.9cm、耳の厚さは7mmほどで、断面は菱形を呈する。左右上方に鎖の類で吊り下げられていた形跡があり、幅1cmほど、正面側から裏面側にわたり変色している。耳の間の長さは9.8cmで、肩幅は3.8cm、肩の中央に幅6mm、長さ3.5cm高さ3mmほどの湯口部分を切断した痕跡がある。肩の張は3mmほどである。正面と裏面の型の合わせ目は、左右にずれていて、正面側が、裏面側より僅かに右側へずれている。肩などのずれの痕跡が目立たないよう鑢で調整されている。残存している左側の目の長さは1.9cm、目の端の幅は2.6cm、目の付け根の幅は3cmである。目の正面は円形に近い。唇の張り出しは1cm、口の幅は1.5cmほどである。総高は19cmほどと推定される。中心から右側の目の端まで11cmほどであり、両方の目の端から端までは22cmほどと推定される。正面、裏面とも一条の外圏線、二条の内圏線、三条の中圏線（所謂子持線）を持ち、銘帯と撞座区、中区の区分がある⁷。

ⁱ 北海道教育庁生涯学習部 生涯学習推進局 文化・スポーツ課



第1図 鰐口出土地付近地形図（国土地理院2万5千分の1地形図「厚賀」「門別」による）

正面の状態

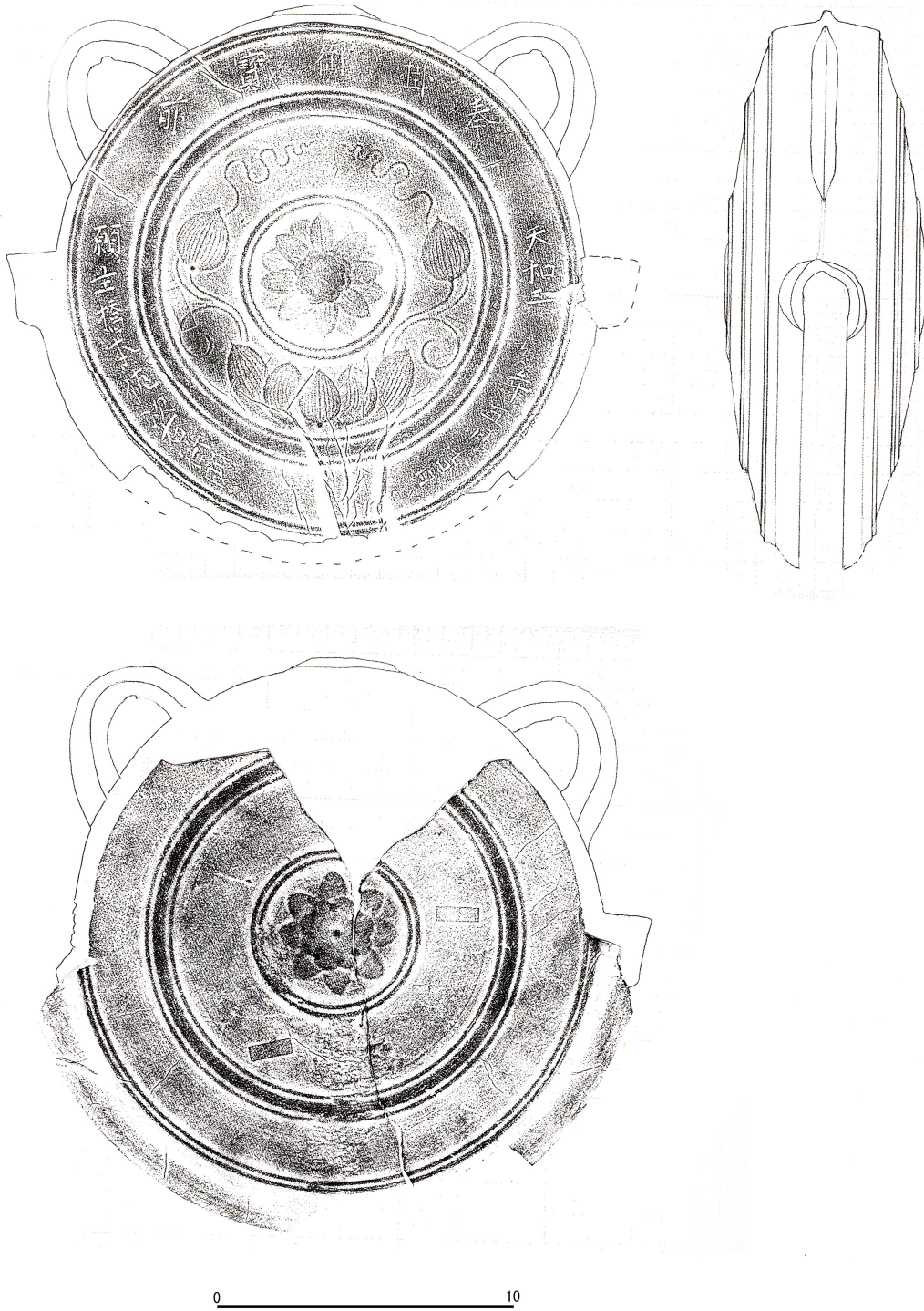
中央に撞座（つきざ）があり、蓮華文が鋳出されている。この蓮華文は葉形の花弁が16葉重ねられている。中区には蓮華唐草文か、あるいは蓮華蔓文というべきか、蓮華と蔓を合わせたような蓮華文の文様が認められる。銘帯にはバランスよく上部と左右に各10cmほどの長さに銘が刻まれている。上部に「奉掛御寶前」、右側に「天和三癸亥年五月吉日」、左側に「願主橋本佐次右衛門」とある。正面の地はほぼなめらかに調整されている。目立つ傷は右側の目の位置から内側にのびる1cmほどの長さのひびであり、縁（ふち）で0.5mmほどの段差がつく。色調は錆により全体的に暗緑色を呈するが、ところどころ擦れたような形跡があり、黒褐色となっている。特に左右の耳の付け根から中央の撞座にかけて二条の筋状に変色している。この鰐口の前に下げられた「鉦の緒」の紐の結び目が、風に揺られて左右に器面を擦り磨いていたからなのだろうか。

裏面の状態

中央の撞座には大きい子房に組み合わせられた8葉の蓮華文が不鮮明に鋳出されている。中区と銘帯は無文であり、器面には円周に沿って製作時の細かい筋目が見られる。撞座の左側の周辺部分から口唇にかけて、縦に幅3cmくらいの帯状にただれたように器面が荒れ変形している部分がある。全体に錆で暗緑色を呈するが、中央の割れ目を境に、右は黒っぽく、左は白っぽく変色している。なお、中区および銘帯部に、錆が剥がれ、後の傷が認められる。この傷については、発掘の際に生じた可能性がある。そうであれば、裏面側の破片が上になった状態で埋没していたことが考えられる。



第2図 鰐口写真 上：正面、耳に付けられているラベル、下：裏面、内面のラベル



第3図 鰐口拓本 上：正面、側面、下：裏面（側面は破損部、ゆがみを補正した模式図）

緑色の錆に覆われた破片の破損の状態は、おそらく正面が下向きになっていて、裏面側に火熱及び重力等の圧力が加えられたことにより、器体と器面が変形し、破損し、破片の移動が生じたことを示しているのではなかろうか。正面側はほとんど無傷で残存し、製作時期からさ程の時間の経過がなく破壊されたようにも思われるが、出土地付近で火災の跡を伴うような遺跡が発見されたならば、破壊の時期を確定させることが可能かもしれない。

4. 製作時期

鰐口の考古学的研究においては、製作技法から見ると新しい形態のものに非常に古い時代の年号の刻まれているものなどがあることから、主として遺物の製作時期をどうして決定するかをめぐって進められてきた⁸。全国に関連する鋳物師の系譜の調査はすすめられているが、作品の編年的研究はなお今後に残されている。これまでの先学の研究成果を踏まえて、管見に触れた北海道の現存資料⁹について大まかな時代的な変化をみることにする。

沼田氏(1915)は面のふくらみの大きいもの、目の大きいものは新しいとされ、香取氏(1923)は撞座と銘文の集成を行い、朝鮮金鼓に起源を求め、各部分の名称を定め、製作法など細かく検討している。久保氏は特に撞座と圏線に着目すべきことを指摘して、北海道の1例を含め中世までの資料178例について検討している。また江戸時代の初期乃至中期頃のものに、蓮華文などの文様で銘帯や中区に装飾を施すものが多いことを指摘し、例示している(久保1936,1977)。愛甲氏(2005)も北海道の1例を含め中世までの資料1285例について、銘文の検討をしている。また梵鐘と鰐口を共に製作している鋳物師については香取氏(1923)、坪井氏(1970、1976、1989)、久保氏(1977)によって注意されている。

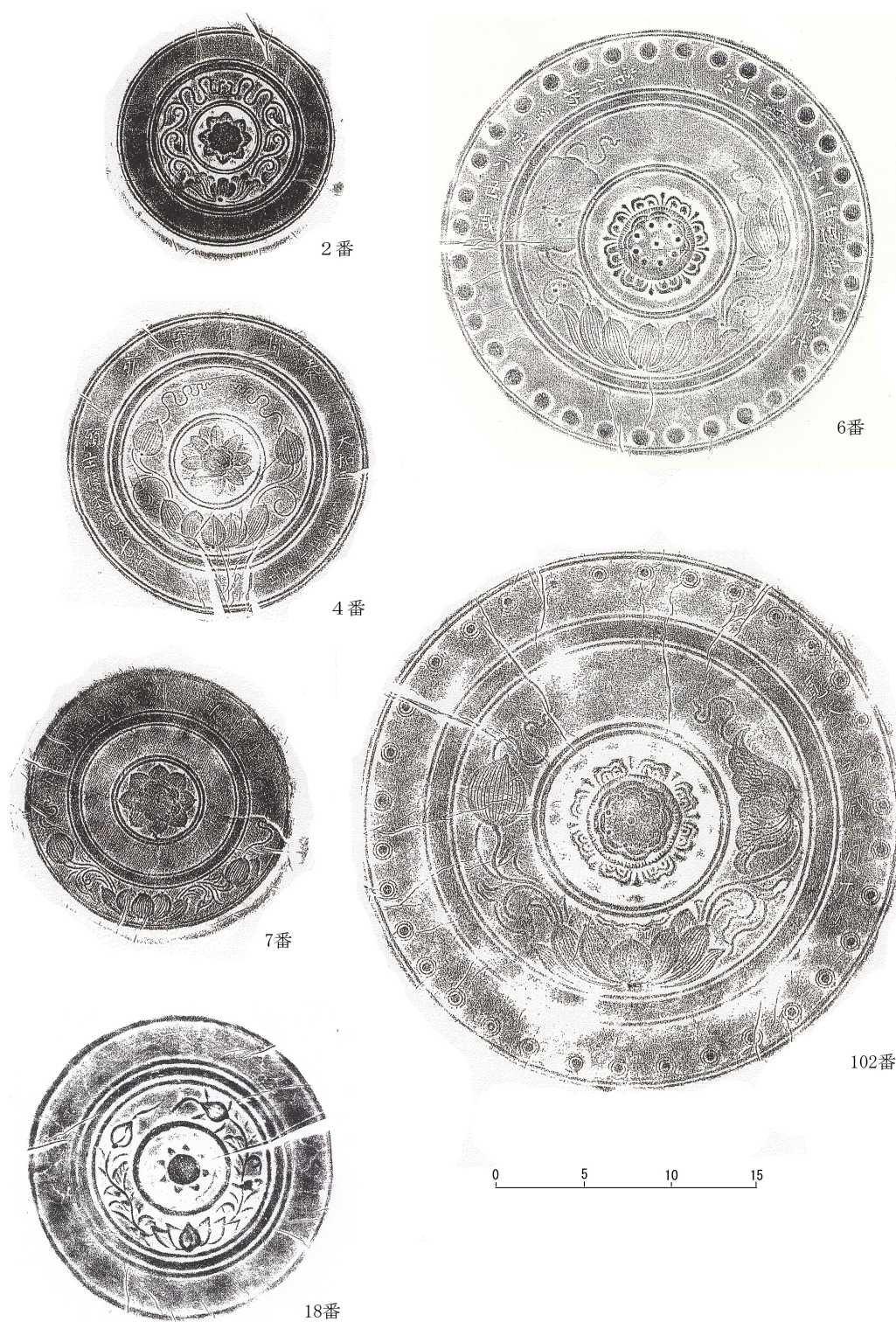
付表に示した北海道の例のうち、1番の永享のものは中世、2~9番くらいのものは比較的扁平で江戸時代前半期の特色を示しているようである。10~17番は江戸時代後期のもので、全体的に大きくて丸みがあり、目も大きい。18番の形態は江戸時代前半部のものに似ているが、肉厚で、明治期の復古調の特色を示すものかと思われる。

そこで、圏線に着目すると、内圏線については、1番の永享11年の例は細い3条タイプ¹⁰、2~4,6~8番は2条タイプ、5,9~18番は1条タイプ。中圏線は1番では細い3条タイプ、2~4,6~8,10~18番は3条タイプの子持線、5番は1条タイプ、9番はよくわからない。1番については文化10年頃の出土品であり、他の物と異なった製作様式を示していて、本州の中世の例とも共通しているので、諸氏の認めるように14~15世紀頃の特色を示すものと見てよいであろう。第1様式としておきたい。2~4,6~8は17世紀から18世紀にかけて時代的なまとまりがあり、内圏線2条タイプとして特色が認められそうである。第2様式としたい。なおこのうち中区や銘帯に蓮華文の文様のある、第4図に示す2・4・6・7番及び102番については一連の時代的な推移を示すものとみなされる¹¹。内圏線1条タイプのものについては、数が多いので、撞座の形態と合わせてみると、5番と9番は撞座と内圏線の間に余白がなく、10~18番は、撞座と内圏線の間に空白部分がある。18番には中区に蓮華文が施され、器壁が肉厚で、肩から胴の周囲、唇にかけて側面全体を鑊で調整している。5番と9番を第3様式、10~17番を第4様式としたい。18番は、刻まれている願主山田文治氏の没年¹²から見て浜厚真八幡神社の創建された明治初期頃の製作とみなされ、従来の伝統に新たな技法が加えられた近代の第5様式としておきたい。

この区分のなかで、本紹介例は第2様式に含められ、一連の蓮華文のあるグループに属するものであり、17世紀から18世紀にかけての江戸時代前半期の特色をよく示すものとみなされる。

5. 願主と鋳物師－発注者と製作者の周辺

本紹介例には願主の人名は記されているが、どこの人物であるかは示されていない。中区に蓮華文の認められる資料に着目すると、手がかりが得られるかもしれない。2番の寛永15年の例と6番の寶永6年の例とであるが、本紹介例に比べると、2番のものは小形で、唐草文のような蓮華の文様が小さく、蔓が多い。松前藩主の縁者の下國宮内慶季により寄進されたものであった。6番の例は、本紹介例の文様に蓮の葉や蔓をさらに加えるなど、華やかにしたもので、



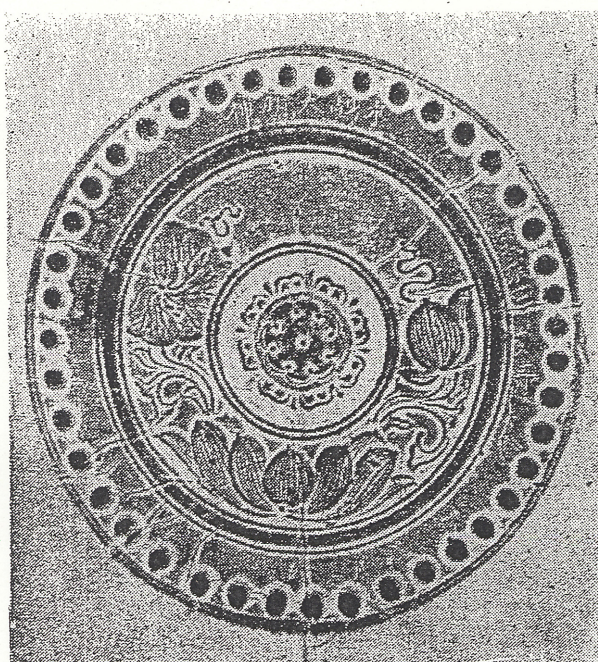
第4図 蓮華文の施された鰐口、2番寛永15年(1638)(善光寺所蔵)、4番天和3年(1683)(植物園・博物館所蔵)、6番寶永6年(1709)(三島神社・七飯町歴史館所蔵)、7番正徳3年(1713)(旧谷好稲荷神社・個人所蔵)、102番(瀧澤寺・厚田総合センター所蔵)、18番(浜厚真八幡神社所蔵)、(同一縮尺、番号は付表に同じ)

やや大形である。刻銘から、松前の光善寺の十二世の住職の時期に、寺院の「常什物」として入手したものであることが知られる。2番と6番はいずれも松前居住者のかかわるものであり、本紹介例の願主も松前に居住する人物である可能性が高い。また、この図柄の2番が如来堂に懸けられ、6番が光善寺で「常什物」（備品）とされていることから見て、出土地あたりに如来堂あるいは観音堂などの仏堂の類が作られていて、そこに懸けられていたものではなかろうか。

この6番の松前光善寺の寶永6年の例と酷似する鰐口が、久保常晴氏（1936）によって大和国の木島神社の例として拓本が示されている（第5図に転載）。この木島神社は現在の奈良市の登彌神社であり、寶永4年のもので、一見して同一物かと思われるほどである。松前の光善寺は京都の寺と関係があることから、これらの鰐口を製作した鋳物師が京都かその付近の在住者であったのではなかろうかと思われる。

坪井良平氏が江戸時代の梵鐘の鋳工について説明している中で、「京都及其附近では（中略）、就中和田信濃大掾國次が最も聞えた名で」と記載している（坪井 1926~1927, 1928, p193）。香取氏（1934）は、京都三条釜座の和田信濃大掾國次について、梵鐘、燈臺、燈籠、仏像、鰐口、塔、鏡などの作例をあげ、「案ずるに和田信濃國次は、寛永十年以後嘉永元年に至る二百余年間同様の作名を以て行はる。この間何代なるか詳ならず。江戸の西村、京の和田は東西における代々鋳師中最も遺品の多き鋳師なり」と述べている。3番の承応3年例には「國次作」と刻まれているとのことである。藩主一族の寄進になる特別製のもので、和田國次の作と認めてよいのであろう。『新羅之記録』には松前景廣が寛永15年、松前宣廣が正保元年に三条の大仏師とのかかわりがあったことを記載している。藩主やその縁者が京都方面の仏師や鋳物師とのかかわりがあったとすれば、町人も寺院も藩主等にならい、京都方面の鋳物師の製作した鰐口を入手したことは、当時の趨勢としてありうることであつたろう（北海道編 1969、北海道庁編 1937、松前町史編集室 1974）。

本紹介例の蓮華文の図柄と一脈通じるよく似た図柄の拓本が『文様集成』第25輯（建築学会 1925）の玻璃版第14の左下隅に「高橋健自氏蔵」「山城眞經寺（寛文七年）」のキャプションを付けて掲載されている（第6図に転載）。これは、坪井良平氏（1924）と香取秀眞氏（1934）によると、「乙訓郡向日町眞經寺」の鐘の撞座で、この鐘には「寛文七丁未年三月廿八日」「冶工洛陽三条釜座住近藤丹波掾佐久」の銘があるとのことである。文様は、中央の蓮弁が本紹介例と共通であり、両脇の蓮弁が、寛永15年の2番の文様にやや近いもので、その間の文様の変遷過程を示すようである。作者の三条釜座の近藤丹波については、香取氏が「國華萬葉」（『日本国花万葉記』）の「山城國諸職名匠の部に鋳物師近藤丹波（三条釜座）と見え、貞享二年版の京羽二重にも鋳師として和田信濃と近藤丹波とを挙げたり」と



口鰐年四永寶社神島木村雄富郡駒生國和大 圖六第

第5図 「大和國生駒郡富雄村木島神社寶永四年鰐口」として、1936年に久保常晴氏によって紹介されたもの。この拓本の上部にみられる「木嶋大明神」は現在の奈良市登彌神社。

記している¹³。代々蓮華文の図柄を入れて製作していたとすれば、本紹介例を含めて蓮華文の鰐口の製作に三条釜座の近藤丹波氏の一族がかかわっていたのではないかと考えられる。



分七寸七横
(年七文寛)寺經眞 城山
藏氏自健橋高

第6図 寛文7年(1667)、「三条通釜ノ座」(『京羽二重』)「鑄師」(いものし)近藤丹波氏による梵鐘の撞座。香取氏(1934、p76)は「この鐘の撞座は蓮華を側面より見たる状を鑄出したり」と記す。

6. 橋本佐次右衛門とは誰か

この鰐口の願主は「佐次右衛門」という名であるので、この時代頃の史料にその名がないか注意してみた。十分な調査をしたわけではないが、目にとまったのは、高倉新一郎氏による「寛文拾年狄蜂起集書」(高倉編 1969)にみられる

「兵庫様御舟数不足の由にて、松前丁人慶七、左次右衛門と申者小船壹艘御買被成候由」

「松前家中町中の舟数大小貳拾艘程も(有)内貳艘は千四百俵斗積申候由。工藤忠兵衛、慶七、左次右衛門と申者手船」

との記事である。

「松前町人」の「左次右衛門」という人物が船を持ち海運にたずさわっていたことが考えられる。工藤忠兵衛と並ぶ人物であったようであるが、高倉氏が句点を入れて読んだ「慶七左次右衛門」の「慶七」の文字は、本紹介資料の如く「橋本」とあったものを、筆写の際、「橋」の文字の木篇の部分と「本」の文字の終わりの縦線と点が注意されず、誤って「慶七」と写された姿を示しているのではなかろうか。「慶七」の文字の部分には姓が記されていたとみるのが自然であるので、ここは本来「橋本佐次右衛門」とあったものと考えられる。

本紹介鰐口の資料を加えて、橋本佐次右衛門の人物像を描くと、京都方面との行き来があり、寛文年間には道内沿岸の海運にも従事し、おそらく、寛文9年の事件で配下の船乗りを多く殺害されるなどの事情があつて、事件後、波恵に仏堂の類を作り13回忌などの法要を営んだものではなかろうか。知られることは少ないが、松前町内では当時工藤忠兵衛と並ぶほどの藩主とも近い有力な町人の一人であったことが考えられるのではなかろうか。

7. まとめ

以下この資料の出土地、製作時期、製作地、発注者と作製された理由、歴史的意義等についてまとめておきたい。

- 1 この鰐口の出土地、出土状況の記録については、「土堂」が「土臺」であろうと考えられるほかには、特別に疑問をさしはさむ理由はない。明治17年4月に岩根静一氏の所有地において出土したものと認められる。
- 2 この鰐口は17世紀後葉前後に京都方面で製作されたものと考古学的に判断され、耳の部分には、特に長期の使用

を推定させる著しい変形などの形跡はない。

3 この鰐口は橋本佐次右衛門が、天和三年に、この出土地付近の仏堂の類の軒に懸け、使用したものと考えて差し支えはないようである。そのために作製されたものと考えられる。

4 橋本佐次右衛門が、『寛文拾年狄蜂起集書』に出てくる「左次右衛門」のことであると考えられるとすれば、この鰐口は、寛文9年の事件に関連する史料の転写の際「橋本」を「慶七」としていた誤写を正す資料ともなり、事件関連の遺物の一つとみなされる。

本紹介資料の調査に当たっては、北大植物園の加藤克氏、市川秀雄氏には資料の提供並びにご教示等を戴き、岩根静一氏に関する資料は新ひだか町の山田一孝氏、藪中剛氏から戴いた。各地の現存鰐口の調査にあたっては、北海道開拓記念館の平川善祥氏、上ノ国町の松崎水穂氏、浦幌町の後藤秀彦氏、稚内市の内山真澄氏、標津町の梶田光明氏、白糠町の厳島神社、増毛町海音寺、石狩市の龍澤寺、石橋孝夫氏、苫小牧市の工藤肇氏、伊達市の善光寺、大島直行氏、北斗市の意富比神社、平野和海氏、松野儀一氏、森靖裕氏、八木橋直弘氏、函館市の湯倉神社、佐藤智雄氏、福田裕二氏、余市町の浅野敏昭氏、七飯町の山田央氏、厚真町の山田稔氏、乾哲也氏には直接資料に関する情報等を寄せていただいた。合わせて日ごろから何かとお世話を戴いている北海道大学附属図書館並びに北海道立文書館、北海道立図書館のスタッフ、道埋文センター並びに道教委文化・スポーツ課の同僚諸氏に感謝を申しあげる。最近、かつて日高地方の考古学的調査にかかわったものの同僚の藤本英夫氏と高橋正勝氏が亡くなられた。謹んでご冥福を祈るものである。

¹ 資料番号は25337である。

² 糸で耳に結び付けられている「札幌農学校所属博物館」と青インクで印刷された、明治30年代前半期に付けられたとみなされるラベルに「沙流郡波恵村、岩根静一」「原由、明治十七年四月同所の土堂ノ」「近方より堀取」と3行に記されている。

内面に貼り付けられている赤インクによる縁取りの印刷された小さなラベルには、「参13」と記されている。このラベルも明治30年代前半期に貼付されたものである。史傳部に「参考品類」の区分が設けられ、13点が明治17年11月までの収藏品であることは、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵の「札幌農学校簿書」（228「明治十八年一月以降 局長上申本局稟議録」）に記載がある。「参考品類」には明治18年中には追加がなく、現存の博物館の簿書では明治19年に「参考品類」の14号の受け入れ記録がある。

³ 北海道大学附属図書館編（1992）p158、1894番「沙流郡波恵村岩根牧場」

⁴ 瀬棚町史編纂委員会編（1995）『瀬棚町史』、p705～706、に文書が掲載され経過が記されており、出土した真鍮製鍬形とみられるものは現在函館市北方民族資料館の所蔵で、横田直成氏が写真を掲載紹介している（横田2002、p127）。

⁵ 当時の岩根静一氏の生活環境については『岩根家一世記』（岩根季昭・岩根秀勝編 2003）、『北海道移住回顧録（岩根静一著）』（山田一孝解説 2004）等で知ることが出来、また『静かな大地』（池澤夏樹 2003、朝日新聞社）にもこれが参考文献として挙げられている。時代の雰囲気は『北の零年』（行動塾監督 吉永小百合主演 東映 2003）でもいくらか知られるであろう。

⁶ 鰐口の各部分の名称は香取秀真氏（1923）の定めたところに久保常晴氏（1936）、香取忠彦氏（1976）、愛甲昇寛氏（2005）も従っており、ここでもそれによる。沼田頼輔氏が従来の名称を使用して、「鰐口の研究」（1915）の中で「時代の古いものは、耳が小さくて、新しきものは大きく、又時代のふるきものは、両面が扁平であるが、新しいものは穹窿状をなして居る」と「耳」と器面のふくらみに注目していた。この耳は香取氏によって目と改められた。現在の表現では新しいものは「目」が大きいというところである。香取氏（1923、p53）は、「沼田氏の「新しきものは穹窿状をなす」との説は、江戸時代後期以後に属するものについては明らかにこれを云ひ得べし」と述べている。

⁷ 圏線の名称は久保氏（1936）による。縁をめぐる外圏線、撞座区と中区を分かち内圏線、外圏線と内圏線との間にある中圏線に着目し、「各部の形式より新古の判定を下すべき特徴明らかならざれども、圏線或は撞座によりその時代的特徴を見る可く」と述べている。久保氏の外圏線数－内圏線数－内圏線数－撞座有無を示す表記法（1977）にならうと、「1-3-2-撞」となる。なお、「撞座」の読み方については、香取氏（1923、緒7、p54）が「ツキザ」とルビを付けていて、「つきざ」とするのが一般的である。

⁸ 沼田氏（1915）、香取氏（1923）、久保氏（1936）、愛甲氏（2005）など。鰐口に限らず、梵鐘などの金石文の扱いについて、坪井良平氏が「考古学を伴わない金石学は、杖を持たない盲人に等しい」と述べたことがあった（坪井 1947、p21）。

⁹ 実物または写真で形態の知られる資料が本紹介例を含めて筆者の手元に現在22例あり、この内無銘のもの2例、銘の年代と鰐口の製作時期が著しく異なると見られるもの2例を除き、まず18例を年代の古い順に示す。

付表（1） 銘の年代と鰐口の製作年代がほぼ一致するとみなされるもの。

番号	年号（西暦）	所在地	所有者、所蔵者等
1	永享 11 年(1439)	函館市	石崎八幡神社、函館市博物館
2	寛永 15 年（1638）	伊達市	有珠・善光寺
3	承応 3 年（1654）	函館市	湯ノ川・湯倉神社
4	天和 3 年（1683）	札幌市	北海道大学植物園・博物館
5	元禄 17 年（1704）	上ノ国町	石崎八幡神社
6	寶永 6 年（1709）	七飯町	三嶋神社（旧松前光善寺）、七飯町歴史館
7	正徳 3 年（1713）	北斗市	（旧谷好稲荷神社）、個人蔵
8	享保 7 年（1722）	浦幌町	浦幌町郷土博物館
9	明和 4 年（1767）	白糠町	（厳島神社）、現在所在不明
10	天明 2 年（1782）	稚内市	厳島神社
11	寛政 3 年（1791）	札幌市	厚田古潭・龍澤寺、北海道開拓記念館
12	寛政 7 年（1795）	札幌市	（増毛別荘・海音寺）、北海道開拓記念館
13	文化 10 年（1813）	苫小牧市	勇弘恵比須神社
14	文化 11 年（1814）	石狩市	石狩弁天社
15	文政 10 年（1827）	標津町	薫別神社
16	文政 13 年（1830）	羽幌町	焼尻・厳島神社
17	文久 3 年（1863）	余市町	余市水産博物館
18	（明治初期頃）	厚真町	浜厚真八幡神社

付表（2） 銘の年代と鰐口の製作年代が著しく異なるとみなされるもの

番号	年号（西暦）	所在地	所有者、所蔵者等
101	康平 3 年（1060）	北斗市	意富比神社
102	寛政 4 年（1792）	石狩市	厚田古潭・龍澤寺、厚田総合センター

付表（3） 無銘のもの

番号	製作年代（推定）	所在地	所有者、所蔵者等
201	寛政前後か	伊達市	有珠善光寺
202	文化・文政か	北斗市	（旧寶永稲荷神社）、北斗市郷土資料館

それぞれの資料に関する参考文献等を示す。1、市川十郎（1856）、北海道庁編（1918、p39）、松本隆（1958、p49）、沢登龍生（1968、p161）、北海道教育庁社会教育部文化課編（1978、p101）。2、最上徳内一行（1791）、菅江真澄（1791）、松浦武四郎（1865）、秋田叢書刊行会編（1932、p572）、内田武志・宮本常一編（1977、p132）、松浦武四郎著・吉田常吉編（1962、p73）、河野常吉編（1926、p85）。正面の直径 12.5cm ほど、銘は「寛永拾五年戊寅五月吉日 下國宮内尉慶季」。3、市川十郎（1856）、河野常吉編（1926、p85・86）、須藤隆仙（1962、p62）、沢登龍生（1968、p161）、函館市史編纂委員会（1980、p408）。正面に「奉掛 薬師堂」など、裏面に「國次作」の銘がある。5、松崎岩穂（1956、p187）、上ノ国町教育委員会編（1976、p19）。6、七飯町歴史館（1998）、実物の正面には、右側に「松前（光善寺）十二代（選譽）快徹代」、左側に「常什物室永六丑歳」（室は寶の誤り。）内は光善寺過去帳により昭和 58 年に永田富智氏解説一七飯町歴史館保管資料による。）の刻銘がある。この「（光善寺）」と「（選譽）」の部分は文字が潰されている。正面の直径は 25cm ほどである。7、正面の直径 15cm ほど、銘は右側に「正徳三癸巳歳三月吉日」左側に「願主三家村善五郎」。8、後藤秀彦（1977）、実物の正面の直径は 12.3cm ほど、年号と干支の違いについては、本来「享保七壬寅年」とすべきものを誤って刻銘したものと考えておきたい。9、渡辺茂編（1954、p314）、「シラスカ観音堂」などと刻まれていたとのこと。10、網走市史編纂委員会編（1958、p401）、稚内市史編纂室編（1968、p114）。11、谷内鴻ほか編（1969、p468、下の写真）。銘は右側に「松前城下村山傳兵衛」、左側に「寛政三辛亥年三月吉日」とある。12、増毛町史編纂委員会編（1974、p1082）。銘は上部に「御寶前」、右側に「毛

人國増毛別狩「辨財尊天」、下部中央には「願主 村山姓 阿部屋 甚六」と4行に記す。13、苫小牧市編（1975、p521・522）、ロバート G・フラーシェムほか（1994、p86・87）。14、田中實・石橋孝夫編（1994、p54・55）。15、標津町教育委員会（1998）。16、羽幌町教育委員会（1992）。17、余市町教育委員会（2004、p18）。18、厚真町教育委員会生涯学習課編（1997、p6）。裏面の中区に縦に銘が刻まれ、右側に「願主」「山田文治」、左側に「支配人」「山田仁右エ門」とある。

なお、101の大野町（現北斗市）意富比神社の康平3年（1060）の鰐口（飯田吉次郎編 1970、岡田 1929、1956、深瀬 1936、阿部たつを 1954、1957、1973）は、10~17の江戸時代後期の形態であり、102の厚田の例（谷内鴻ほか編 1969、p468、上の写真、銘は右側に「寛政四壬子歳八月廿日」）は、6番の寛永年間のものと同時期とみなされる江戸時代前半期の形態である。201の伊達市善光寺の無銘の大型の鰐口は形態からみて寛政年間のものに近いとみなされる。善光寺は官寺として江戸との関連が深いので、この鰐口は江戸の製品かもしれない。202は文化・文政期のものに近いようである。また、明治40年9月寿都町の寿都病院裏で発掘された「奉掛、文政十丁亥年田附氏、惣濱中」の銘のある鰐口（河野 1926、p118）は、現在所在不明で形態が知られず、含めていない。さらに、所在の情報などを得ていても、未確認のものは含めていない。確認できれば追加したい。古くからの記録にある鰐口については阿部たつを氏（1954、1957、1973）、須藤隆仙氏（1962、1966）がまとめられている。

¹⁰ 久保氏はこの例を、2・3・2・〇と表記している（久保 1977）。内圏線を2条と観られたようであるが、実際は3条である。類例には杉浦三郎兵衛氏の紹介している應安3年の例（杉浦 1933、写真番号13）がある。

¹¹ 図柄の様式からみて、2番とそれ以降のものとで弁の形態など、やや異なった趣がある。2番は左右対称で、4番もほぼ対称のようであるが、6番、102番では葉を左右どちらかに配置するなど、非対称のものに変化している。さらに7番では蓮華文が銘帯に配置され、それ以前のものが中区に配置されている状態から変化している。これらの資料からみると、中区に蓮華文を配置する手法は、寛永年間には出現していたようであり、その後、蓮華文は、天和、寛永年間には、各種の大きさに合わせて、一定の形式を踏襲しながら、多様な、賑やかな図柄に発展していったものとみなされる。それが、正徳期には行過ぎが規制されたためか、銘帯に幅狭く表現され、この頃を境に、蓮華文を施す鰐口がすたれていったのではないと思われる。

なお、これらの鰐口は見込み生産がなされていて、注文者には、既製品に銘を刻んで渡していたもののようである。102番は、そのような鰐口の残りのものを後世に再利用したものとみなされる。なお、18番はこれらを模して明治期に製作したもののようである。ただし、ひな形は別種のものかもしれない。

¹² ロバート G・フラーシェムほか（1994）巻末「山田文右衛門」家系図」では明治31年に49歳で亡くなっている。

¹³ 『日本国花万葉記（一）』（朝倉 1969、p57）には「鋳物師（いものし）」「和田信濃 三条釜ノ座 近藤丹波 同町」とみえる。この書は元禄10年（1697）の菊本賀保の『日本国花萬葉記』の縮刷版。貞享2年（1685）版の「京羽二重」（湯浅 1915、p205）には「鋳師（いものし）」「三条通釜ノ座 和田信濃」「同町 近藤丹波」とある。香取氏は「國花萬葉」を寛文延寶頃の書とみていた（香取 1934、p160）。

（文献目録）

- 愛甲昇寛（2005）「鰐口にみる銘文の表現」『仏教美術と歴史文化』株式会社法蔵館
 秋田叢書刊行会編（1932）「蝦夷廻天布利」『秋田叢書別集 菅江真澄集』第四 秋田叢書刊行会
 朝倉治彦監修（1969）『日本国花万葉記（一） 古板地誌叢書Ⅰ』古板地誌叢書刊行会 すみや書房
 厚真町教育委員会生涯学習課編（1997）『あつま再発見 歴史と文化への誘い』厚真町教育委員会
 網走市史編纂委員会（1958）『網走市史 上巻』網走市役所
 阿部たつを（1954）「鰐口の行衛」「荒木大学のこと」『函館雑記帳』無風帯社
 阿部たつを（1957）「大野村意富比神社の鰐口」「知内温泉薬師堂の棟札」『函館雑記帳』無風帯社
 阿部たつを（1973）「大野村の鰐口」「荒木大学のこと」『函館郷土史随筆』北海道出版企画センター
 飯田吉次郎編（1970）『大野町史』大野町
 池澤夏樹（2003）『静かな大地』朝日新聞社
 市川十郎（1856）『蝦夷実地検考録』
 内田武志・宮本常一編（1977）「えぞのてぶり」「えぞのてぶり 続」『菅江真澄著作集 第二巻』未来社
 岡田健蔵（1929）「八百年前の大野村の鰐口」『函館』第3年第8号
 岡田健蔵（1956）『函館百珍 函館史実』岡田イネ
 香取忠彦（1976）「梵音具」『新版仏教考古学講座』第5巻 雄山閣出版
 香取秀眞（1923）『金鼓と鰐口』志村鋼平
 香取秀眞（1934）『日本鋳工史 第一冊』郷土研究社
 上ノ国町教育委員会編（1976）『かみのくにの文化と伝説』上ノ国町
 久保常晴（1936）「鰐口」『佛教考古学講座』第8巻 雄山閣
 （久保常晴（1967）「鰐口の研究」『佛教考古学研究』（ニュー・サイエンス社）は多少の字句と写真が異なっているが、ほぼ同文のものである。1936年版の第六図「寛永四年鰐口」は、1967年版では第六図版6として掲載され、「寛永4年」と誤ったキャプションが付けられている。久保常晴（1971）「鰐口」『仏教考古学講座』第4巻（雄山閣出版）は写真がやや異なるものの、1936年のものと同文）
 久保常晴（1977）「川崎市の中世在銘の鰐口」『続佛教考古学研究』ニュー・サイエンス社
 建築学会（1925）『文様集成』第廿五輯 吉川弘文館
 河野常吉（1899）『北海道殖民状況報文 日高国』北海道庁殖民部拓殖課
 河野常吉編（1926）『国産振興博覧会北海道歴史館陳列品解説』東武
 後藤秀彦（1977）「享保七丁丑年銘のある鰐口」『浦幌町郷土博物館報告』9
 沢登龍生（1968）「宗教」『北海道開拓記念物概要（第二部）』北海道教育委員会
 標津町教育委員会（1998）『標津の文化財』
 菅江真澄（1791）『蝦夷廻天布利』（秋田叢書刊行会 1932、内田ほか 1977 による）

-
- 杉浦三郎兵衛（1933）『雲泉莊山誌』巻之四
 須藤隆仙（1962）「永享年中の鰐口その他」『北海道仏教史の諸研究』第1巻
 須藤隆仙（1966）「永享年間の鰐口と念仏信仰」『日本仏教の北限』教学研究会
 瀬棚町史編纂委員会編（1995）『瀬棚町史』（瀬棚町）
 高倉新一郎編（1969）「寛文拾年狄蜂起集書」『日本庶民生活資料集成』第四巻 三一書房
 田中實・石橋孝夫編（1994）『石狩辨天社史』石狩辨天社創建三百年記念事業実行委員会
 谷内鴻・藤村久和・鈴木藤吉・木滑二郎編（1969）『厚田村史』厚田村
 坪井良平（1924）『京都及京都近郊徳川期吉金文年表』（『梵鐘の研究』p474~480 所収）
 坪井良平（1926~1927）「梵鐘」『考古学講座』第1号〜第8号 国史講習会
 坪井良平（1928）「梵鐘」『考古学講座』第2巻、第7巻 国史講習会・雄山閣
 坪井良平（1947）『梵鐘と古文化』大八洲出版株式会社
 坪井良平（1970）『日本の梵鐘』角川書店
 坪井良平（1976）『梵鐘』学生社
 坪井良平（1989）『梵鐘と考古学』ビジネス教育出版社
 坪井良平（1991）『梵鐘の研究』ビジネス教育出版社
 苫小牧市編（1975）『苫小牧市史 上巻』苫小牧市
 七飯町歴史館（1998）『文化の森 七飯町歴史館』七飯町歴史館
 沼田頼輔（1915）「鰐口の研究」『考古学雑誌』第5巻第12号
 函館市史編纂委員会編（1980）『函館市史』
 羽幌町教育委員会（1992）『焼尻島の文化財』
 深瀬春一（1936）『蝦夷地に於ける倭人伝説攷』間瀬印刷所出版部
 北海道教育庁社会教育部文化課編（1978）『北海道の文化財』北海道教育委員会
 北海道大学附属図書館（1992）『明治大正期北海道写真集』北海道大学附属図書館
 北海道庁編（1918）『北海道史 第一』北海道
 北海道庁編（1937）「福山秘府」『新撰北海道史』第5巻資料1
 北海道編（1969）「新羅之記録」『新北海道史』第7巻資料1
 増毛町史編纂委員会編（1974）『増毛町史』増毛町役場
 松浦武四郎（1865）『東蝦夷日誌二編』
 松浦武四郎著・吉田常吉編（1962）『松浦武四郎著 蝦夷日誌 上』時事通信社
 松崎岩穂（1956）『上ノ国村史』上ノ国村役場
 松前町史編集室（1974）「松前家記」『松前町史』資料編第1巻
 松本隆（1958）『近世渡島地方史』松前史談会
 最上徳内一行（1791）『東蝦夷道中記』
 （この書名は、北海道庁編（1918）では『東蝦夷地道中記』、阿部たつを（1954、1973）では『東蝦夷地道中日記』とされている。
 今『新北海道史』の年表の表示による）
 山田一孝解説（2004）「北海道移住回顧録（岩根静一）」「牧畜沿革摘要（岩根静一）」『北海道移住回顧録』静内町郷土研究会
 湯浅吉郎（1915）『京都叢書』（「京羽二重」他）京都叢書刊行会
 余市町教育委員会（2004）『余市町の文化財』
 横田直成（2002）「栗山町桜山出土の鋳形」『北海道の文化』第74号 北海道文化財保護協会
 ロバート G・フラーシェム、ヨシコ N・フラーシェム（1994）『蝦夷地場所請負人』北海道出版企画センター
 渡辺茂編（1954）『白糠町史』白糠町役場
 稚内市史編纂室編（1968）『稚内市史』